

博士論文（要約）

論文題目 語りの断層——ドイツ連邦共和国におけるポーランド人作家の現代文学
Dislocated Narratives—Contemporary Polish Literature in the Federal Republic of Germany

氏名 井上 曉子

本研究は、国境線が幾度も引き直され、民族・文化・言語の混成が進んだポーランド北部／西部国境地帯が、社会主義末期ポーランドからドイツ連邦共和国へ移住した 5 人のポーランド人作家の文学においていかに表象されうるかを論じたものである。本研究が対象とする作家は、1950 年代半ばから 60 年代旧ドイツ領にあたるポーランド北部／西部国境地帯に生まれ、ポーランド語を母語とする。彼らは冷戦末期の 1980 年代西ドイツへ移住し、体制転換後もドイツに留まり、ポーランド語ないしドイツ語で創作している。

世代的に言うと、これらの作家たちは、第二次大戦後ポーランド東部領から強制移住させられた人々の次世代にあたる。周知のように、ポーランド北部／西部国境地帯はかつてドイツ東部領に属し、第二次大戦末期から戦後にかけて、ドイツ系住民の逃亡と組織的追放が起こった地域である。追放後には、ソ連に割譲された旧ポーランド東部領から、ポーランド系住民が強制的に移住させられた。

ポーランド北部／西部国境地帯では、1980 年代末から 90 年代、社会主義時代に推進されたポーランド化政策を見直し、(国家ならぬ) 地域の記憶を通して、過去を複眼的に想起する試みが始まった。それは、社会主義時代上から押し付けられた一枚岩の歴史観や民族観を、辺境地帯の視点から脱構築する文化運動であった。1950 年代ないし 60 年代生まれの世代は、幼少期、自分たちの故郷にユダヤ文化やドイツ文化を発見するという共通体験をもつことから、この運動をけん引する中心的な勢力となった。

文学の分野でも、この世代からは、現代ポーランド語文学を代表する多数の作家がデビューした。彼らは、歴史的事件の記憶から私的な物語までを絡み合わせ、地域の複雑さを多層的なテキストとして表象するという手法を編み出した。それ以来、ポーランド北部／西部国境地帯は、何度も書き込みが可能なテキスト、すなわち「再録羊皮紙 (パランプセスト)」に譬えられている。

他方、本研究で取り上げる作家たちは、ちょうど 1980 年代西ドイツへ移住しており、この文化運動には直接関わっていない。そのせいで、彼らの文学はこれまで「ポーランド語文学」ないし「ドイツ語文学」という枠組みで受容されることはあっても、「地域の文学」とはみなされずにきた。彼らの文学で指摘される特徴は、もっぱら手法や美的要素に限定され、彼らの文学を取り巻く社会的歴史的條件は考慮の外に置かれた。しかし、本研究では、ドイツ／ポーランドにまたがる地域の固有性、1981 年の戒厳令から体制転換を経て 2004 年に至るまでという時代性、ポーランド語／ドイツ語圏の文芸批評という三つの観点を手がかりに、グローバル化した移動の中へ溶解してしまったかのように見える彼らの存在形態に輪郭を与えようと試みた。そうすることによって、彼らの文学の成立・発展の経緯を明らかにし、彼らが、体制転換に伴う社会及び創作環境の変化に影響されながら、題材・テーマ・手法を大きく変えてきたことを示すことができると考えたためである。とくに、彼らの独特な「一人称体の語り (わたし語り)」に着目して、ポーランドからドイツにまたがるこの地域の複雑性がいかに表象されうるかを論じた。

本研究は、二つの部から構成されている。第 1 部では、体制転換後もドイツにとどまり、

ポーランド語ないしドイツ語作家として活動する人々が、どのような条件の下で創作したかを明らかにした。第1章では、まず世界各地のポーランド人コミュニティの中で、ドイツ連邦共和国のそれが規模や雑種性において突出している理由を歴史的に説明し、次に、1945年以降のポーランド語による文化活動の発展の経緯を示した。さらに、本研究で取り上げる作家が移住した1980年代、西ドイツへの移住の可能性が広がり、様々な種類の移民が主に稼働目的でポーランドからやってきたために、ポーランド人コミュニティの雑種化が進み、それに応じて、亡命文学では描かれることのなかった稼働移民の暮らしや、ドイツ系帰還者の抱える複雑なアイデンティティが作品のテーマになったことを明らかにした。当時移住した作家たちは、こうしたテーマに着手することで、伝統的な「亡命」とは異なる「移住」というトposを形成したことが分かった。

第2章では、1990年代ドイツで出版されたポーランド語文芸誌 *Bundesstraße 1* を手がかりに、体制転換後もドイツにとどまった若手作家のアイデンティティが多様化する様子を論じた。社会主義体制崩壊後、ポーランド国外では亡命文芸誌や亡命出版社がその役目を終え、ポーランド国内では「在外（亡命）文学」と「国内文学」を統合する動きが進んだ。本章では、ポーランド国外における創作環境の変化や、「ポーランド語文学の再編」が若手在外作家に与えた影響を論じたうえで、ザウスキとムッシュェルという対照的な二人の作家を例に取り上げ、彼らが「ポーランド語作家」あるいは「ドイツ語作家」としてのアイデンティティを確立するプロセスを明らかにした。

第3章では、2000年ベルリンに設立された「ポーランド人失敗者クラブ」を例に、在外ポーランド人による新たな文化活動の戦略性について論じた。ベルリンには、1980年代から雑種的なポーランド人コミュニティが存在し、彼らを対象とする文化活動がポーランド語で行われていた。しかし、上記のクラブは、ベルリンの多民族的カルチャーシーンへ参入することを目指し、ドイツ語話者を対象に文化を発信した。彼らは、ドイツ社会に普及するポーランド人のネガティブなステレオタイプを自己定義に用い、ポーランド文化において絶対的で不可侵とみなされてきたシンボルを、ヨーロッパ的な視座から相対化した。それは、既存のディスコースをずらし、異化する行為に他ならなかった。彼らはそうした巧みなやり方で、ドイツ人でもなくポーランド人でもない、「失敗者」という曖昧な境界領域を作り、その中に人々を招き入れていることが明らかになった。

つづいて第2部では、ポーランド北部／西部国境地帯に生まれた5人の作家の文学において、「地域」や「場所」がどのように描かれるのかを、とくに「一人称語り手」に注目して論じた。従来の研究において、彼らの文学における「自伝的一人称語り手」の役割は、もっぱら手法や美的観点からのみ論じられてきたが、本研究では、これらの語り手が「放浪者」（ルドニツキ）、「原郷喪失者」（ニェヴジェンダ）、「旅行者」（ゲルケ）、「地球外生物」（ムッシュェル）として、国家、地域、歴史、民族的文化的アイデンティティをめぐる様々なディスコースの裏をかき、それらを自己定義や表現に利用したり、脱臼させたりしていることに注目した。

第1章では、まず「一人称体の語り」という形式が、1980年代に書かれたクシシュトフ・マリア・ザウスキとヤヌシュ・ルドニツキの短篇においてどう用いられたのかを論じた。「ドイツ系帰還者」や「稼働移民」として西ドイツへ移住した人々のアイデンティティの葛藤を描いたこれらの作品は、亡命文学と対置され、亡命のトポスを「脱神話化」する文学として受容されてきた。しかし、「一人称体の語り」に注目すると、これらの小説が「移民の身の上話」にとどまらない、豊かなパフォーマンス性に満ちていることがわかった。

第2章では、1990年代以降「自伝的一人称語り手」という形式を確立して、「メタフィクション文学の旗手」と言われるようになったルドニツキを取り上げた。ルドニツキは、体制転換後、「亡命の脱神話化」といったラベルを巧みにかわし、移民文学というジャンルを踏み越えることから創作を開始した。彼は、ドイツ／ポーランド間をパラノイア的な執拗さで放浪する一人称語り手の姿を借りて、現実と架空の境界を巧みに拭い去りながら、立ち寄る先々で、土地に刻まれた歴史と対決した。さらに、一度発表したテキストを繋ぎ合わせ、小説に仕立て上げるという独特なやり方で、「場所の記憶」を自らの手で再編してみせた。

第3章で取り上げたクシシュトフ・ニェヴジェンダは、ドイツやポーランドといった具体的な要素を創作に一切持ち込まない作家であった。彼の小説において、故郷は実在する都市や地域としてではなく、失われた時空間として描かれていた。また、彼の一人称語り手には、故郷の記憶を共有するべき相手をもたない「原郷喪失者」という性格が付与されていた。ニェヴジェンダが「異国で話される母語の響き」を効果的に用いて行う「ポーランド語の異化」も、外界とうまく折り合いをつけることのできない個人の孤独や、わななく感情を描くためのものであることがわかった。

第4章では、ポストモダニズムの寵児として脚光を浴びたナタシャ・ゲルケを取り上げた。ゲルケは、都市や地域を、固有の歴史や文化をもつ場所としては描かない作家であった。彼女の小説の中で、伝統的な価値体系や民族的文化的指標は相対化され、登場人物は「人格を欠いたアイコン」と化していた。同様に、場所は固有性を奪われ、登場人物の憧れや嫌悪感や執着の対象としてのみ描かれた。本章では、こうした描き方の根底にあるのが、場所や社会と有機的なつながりをもたない「旅行者」のまなざしであることが指摘された。

第5章では、ポーランド語作家としてではなく、ドイツ語作家として成功したダリウシュ・ムッシェルを取り上げた。彼の初のドイツ語小説『自由はヴァニラの香りがする』では、「地球外生物」である一人称語り手に、「ゲルマン＝スラヴ＝ユダヤの混血」という呪われた運命が課せられていた。西ドイツへ移住した語り手は、ドイツ社会で生き延びるために「スラヴ人」「東欧移民」のネガティブなステレオタイプを逆利用し、「ユダヤ」「強制収容所」といったモチーフを挑発的に用いて、ドイツ社会の道徳的規範を傷つけていた。こうした振る舞いは、ムッシェルが「地球外生物」のまなざしを通して、国家、地域、歴史、民族的文化的アイデンティティをめぐる様々なディスクールを鋭く脱神話化し、個人とそれらの言説との不安定な関係を描いた結果であることが指摘された。

これらの5人の作家の例から言えるのは、彼らが今日、既存のディスクールを戦略的に脱

曰させ、異化する行為主体という役割を担いながら、地域像を、自らの手で新たに結び直そうとしている、ということであった。彼らは、場所と有機的なつながりをもたない人々や、場所の記憶を共有すべき相手をもたない人々を一人称語り手として、既存のディスクール——ポーランドの社会主義体制によって押し付けられた単一民族神話、ポーランド人に対するネガティブなステレオタイプ、「ポストモダニズム」をめぐる文芸批評、彼らの出身地であるポーランド北部／西部国境地帯で書かれる文学作品など——を戦略的にずらし、脱臼させている。本研究では、そこに生まれる独特な屈折を、「再録羊皮紙」に作られる「断層」とみなし、こうした方法によってのみ表象しうる人々、時代、そして何より地域が存在する、という結論に至った。